

宣告 上卷

加賀乙彦



新潮社版



せん こく
宣 告 上巻

発 行 1979年 2 月20日

13 刷 1979年10月15日

著 者 加賀乙彦

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

郵便番号 162

東京都新宿区矢来町71／振替東京 4-808

電話(03)266-5111業務部／(03)266-5411編集部

印刷所 東洋印刷株式会社

製本所 神田加藤製本株式会社

定 価 1500 円

© 1979, Otohiko Kaga, Printed in Japan.

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

宣告
上卷
目次

第一章 春の吹雪

7

第二章 むこう側

114

第三章 悪について

236

第四章

涙の革袋

(1・2)

367

装
幀
司
修

宣

告

上卷

第一章 春の吹雪

1

鉄と石とが響き合う。コンクリートに嵌め込まれたレールを重い車が行く。食事運搬車である。青衣の雑役囚がいやいやながら押す様子が目に見えるようだ。看守が鍵を取り出した。鍵先が油染みた音をたて、鉄扉が開くと、鋭い錆の軋みが耳底をひっ搔いた。

その一刻を待ちうけていた人々がにわかに動きだした。さわがしく物音が立つ。足音、声、とりわけて水の音だ。食器を洗い、便所をつかい、洗濯をする。壁の中を盛んに水が流れていく。まるで壁が生きていて、腸液、血液、粘液を複雑な内臓の中に通わせているようだ。しかし、ひとしきりの盛りをすぎると騒音は徐々に鎮ってきた。人々が各自の部屋の中でおのがむきむきに時間を使い始めたのだ。噂話にふける者、将棋をさす者、請願作業にはげむ者、短

歌をつくる者、手紙を書く者、そして読書する者。

他家雄^{たけ}は畳の上に毛布を敷き、積みあげた蒲団を机に見立てて坐った。読みさしの『自然の中の人間の位置』を開き、目を馴らすため数行読んで、気乗りせぬことに気付いた。視線が文字に弾ね、先へ進めない。

不吉な予感がする。今朝こそ自分の番だという気がする。自分が風にゆらめいている蠟燭の小さな焰のように頼りなく思われる。不意に扉があき、それで吹き消されてしまう。一切が終りになる。

明け方に長い夢を見た。夜通し風雨の荒れる音を聞いていると思つたが、夜が明けてみると乾いた中庭に日光が当たっていて、それが夢であると分つた。しかし、夢が現実を予告することはよくある。いつかも隣房の者の不幸を夢で

見たあと、その者が本当に不幸に会ったことがあった。あの嵐が実際の予兆でないという保証はどこにもない。

黒い未来が確実に忍び寄ってきている。この予感の鮮かさはただごとではない。

彼は窓の方角を見た。そこは一畳ほどの板敷で、窓の真下に洗面台、右手に水洗便所、左手に戸棚がある。洗面台には木の板が渡してあって机を兼ね、水洗便所は蓋をしめると椅子になる。戸棚には荒目の金網戸がつき、中が透かしで見える。それはここでも同じ設備であり、彼には見慣れて何の変哲もない。

が、いま、彼はそれを死者の部屋の光景としてひとごとのように見た。男たちが声高に話している。

「はあ、これがさっき処刑された楠本他家雄の部屋か。なかなかよく整頓されているじゃないか」

「綺麗好きだったらしいねえ」

「おや、辞書が一杯あるね。勉強家だったんだな。カトリック大辞典、聖書、基督信者宝鑑。あいつは信者だったかな。そういうえば壁に、カトリック・カレンダー、マリア像、トラピスト修道院の絵葉書」

「下着は全部洗濯してあるよ。やっぱり相当の綺麗好きだね。この段ボール箱の中は手紙でぎっしりだ。輪ゴムできちんと束ねてある。掃除も行き届いている」

「花が好きだったんだねえ。チューリップと菊がインスタント・コーヒーの空瓶にさしてあるよ」

男たちは部屋の中を片付けていく。彼の持物は集められ、持ち去られる。裸の部屋には住んだ者の痕跡がもはや何も残らない……

ところで、いま、何かが異常だ。彼は我に返って大辞典や聖書の並ぶあたりを凝^じと見た。一直線に整頓しておいたはずの書物に明らかな乱れが見られる。そして、カトリック・カレンダーが変な具合に傾^かいている。

毎朝起き抜けに昨日の日付を鉛筆で抹殺するため、けさもそれに触れはしたが、彼の性分として正しく垂直の位置にそれがないと気がすまず、こんな変な具合に傾けた覚えはない。これでは日本二十六聖殉教者が、十字架の上で昼寝でもしているふうに見えてしまう。

「風のせいだろう」と彼はひとりごちた。

「そう。風はあるがそれほど強くはない」と、彼の中のもの一人の彼が言った。

「しかし、おれのほかに誰もいやしない。むしろ昨夜から今まで房内の捜検もなかったし……」

「誰かが入ったんだよ」

「いたい誰が」

彼は立っていき、注意深く戸棚の上を眺め、石膏の聖母

子像が心持ち位置を変えているのに気付くと身震いした。一直線に並べた筈の書物の背にも凹凸ができていた。フアイルから一枚の美濃紙が食み出ていた。押し込もうとしたが、かえって美濃紙は皺くちやになってしまった。舌打ちして引き出すと、タイプ文字が皺の間で嗤^{わら}っていた。

本件上告を棄却する。

判決謄本である。六年前の一月二十五日、最高裁第二小法廷でこの宣告がおりた。最高裁の場合被告は出廷しないので、母は法廷から直行していちやく彼に結果を知らせてくれた。母は泣いていた。彼は、まだすぐ処刑されるわけではないと母を慰めた。母の希望どおりすぐ判決訂正申立書を書いた。翌日弁護士^{ロース}の並木宙が来て説明してくれ、彼は法律の条文が強力な鉄鎖となつて自分を縛りつけたことを知った。

「いいね、最高裁の判決は文字どおり最高の決定で、もうきみ個人の力では動かすことはできない。判決後十日目に死刑は自動的に確定し、きみは死刑確定者という身分になる。刑の執行は確定の日から六箇月以内に法務大臣の命令によつておこなわれる。それがいつだということは分らない。ある日突然に命令が出される。しかし、刑の執行は種

種の理由によつて延期される。上訴権回復の請求、再審請求、非常上告、恩赦の出願などがあると、手続が終了するまでは延期されるんだ。ただし……」

弁護士は不意に言葉を切った。その先を彼は聞かずとも知っていた。一切の手続を踏んでも結局は刑の執行はまぬがれ難いのである。

「しかし延期の公算はゼロではないのだから」と弁護士は言い直した。「科学的に言つてね」

日頃、情状だとか心証とかを重視していた弁護士が科学という言葉を口にしたのは初めてである。彼はいくらか照れているように思えた。他家雄はきびしい表情で弁護士の笑を消そうとした。しかし弁護士はなおも笑顔をくずさず、肩でもたたきそうな親しげな素振で近付き、恋文でも手渡すように判決謄本を差出した。そこにたった一行、

本件上告を棄却する。

とあった。わずかこの一行の言葉は、鋭利な剣となつて、彼の命脈を断ち切った。その絶大な力を誇るかのように言葉は、いま、嗤^{わら}っている。

「こんなものが、いったい、いつ、どうして飛びだしてきただのか」と彼は自分に尋ねた。

「だから、誰かのいたずらだよ」ともう一人の彼が答えた。

彼は美濃紙の皺を伸ばし、大型のカトリック大辞典の下に押えこみ、聖母子像の顔を正面に直した。坐って『自然の中の人間の位置』に入りこもうと、何行か文章を追ってみる。百万年か二百万年前か、正確には分りませんが、大分の大昔、地球上には現在とほぼ同じ動物が発生していました。狼、狐、鼬、穴熊、鹿、猪などがいました。ただし、人間のみが見当らなかつたのです。ほとんど現在の私たちの世界なのに、人間のみが見当らないのです。まったくのところ、人つ子一人見当らないのです。なるほど、そういうことか。人間は誰かが急いで製造したように唐突に出現し、全地球にひろがっていった。その不思議な生物が数えきれぬ交配を重ねた末、この自分、楠本他家雄が生み出された。なるほど、なるほど、そういうことか。人間が唐突に出現したのなら唐突に消滅するかも知れぬ。それは彼には朗らかな空想であった。人々はみんな死に絶え、二百万年前と同じく動物だけが地上に残る。狼、狐、鼬、穴熊、鹿、猪の世界。かれらだけの世界。

「こいつは愉快だ」彼は声高に言うて笑つてみた。笑い出したところ、思いがけなく笑が溢れ出、ついには下腹から痙攣がおこり、止らなくなつた。規則によって禁止されていなければ、床を転げまわりたいところである。壁に向つ

て後頭部を打ち当てた。頭蓋骨には一種の弾性があつて硬い壁の上でバウンドをする。あまり強くすると骨を砕くだろうが、そこはよくしたもので一定の強さ以上に打ち当てると目の底を赤い火が走り危険を知らせる。その手前でやめれば、頭の血が降りて、昂つていた気が休まる。何回かそうしていると、壁のむこうから鈍い衝撃が答えてきた。隣の河野が抗議しているのだ。他家雄がやめるとむこうもやめた。始めると始めた。しばらく繰返したあと、彼は河野と話をしたくなつた。

把手の螺子（ねじ）がゆるんでいて、窓がうまく開かない。金網に遮られて螺子まで手はとどかず、二度ほど修理を願ひ出たが官のほうでは受け付けてくれぬ。やつと押し開いた磨硝子窓の下隙間から中庭の一部が見えた。枯小芝の中をアスファルトの道が貫いている。風音に混つて、人々の雑談が流れこんできた。「3八歩」「4三角」と隣房同士で将棋を指している。看守の悪口、女の噂、まずい飯の苦情、高笑、ひそひそ声が飛び交っている。

仲間うちの会話だ。この四舎二階の一角に集められたゼロ番囚たちである。収容番号の末尾がゼロのゼロ番囚は、当拘置所がもつとも重要視する囚人である。他家雄のような死刑確定者が十数人、無期刑が確定して他の刑務所に移送を待つ者が数人、一審で死刑や無期が宣告され上訴中の

者が二十人ほど、それにまだ一番中の被告が十人ほどいる。共通していることは全員が殺人犯で死刑か無期の重刑を将来科せられるか、既に科せられていること、そして全員が特別頑丈な独居房に収容されていることである。いきおいお互い同士の話は窓ごしとなる。

他家雄は河野を呼んだが返事がない。窓を閉めているらしい。拳で四点打の合図を送ってからもう一度呼んだ。返事があった。押殺した低い声である。相手の三角形の鋭い目付を感じさせる声だ。この男は、いつも何かを警戒する様子である。

「べつに用事はないけど、ちょっと話したくなつてね。いま、なにをしてるの」

「読書だ」

「勉強中か。じゃあとにするよ」

「かまわん」河野は恩恵をほどこすように言った。「話してもいい。話せよ」

「そうだな」他家雄は考えた。「話せよ」と言われてみると別に改まって話す話題も見当らぬ。

「おれのほうで聞きてえことがある」河野は尋問口調で言った。「お前、このまえ、所長に面接つけたそうだな」

「ああ、そのことか」他家雄はぎくりとした。まだ誰にもその事を打ち明けていないのに、この男はどこから聞き付

けたのか。彼は用心深く言った。

「つけ、たんじやない。呼出しを受けたんだ。まったく突然、呼出されたんだ」

「ふむ、お前、何をしゃべりやがったんだ」依然として尋問の口調だ。所長が何の用事で呼び出したかと尋ねず、何をしゃべったかがこの男の問題である。河野は処刑の順番が所長の思惑で決まると信じている。ゼロ番囚中にいるスパイが、確定者の動静を一々通報しているに違いないと推測している。

「おれが雑誌に連載している獄中記が、あんまり露骨にこの実態を書きすぎると注意されたんだ」

「そのくらいなら、区長が注意すりゃいいだろうに」

「それがさ」他家雄は言い淀んだ。所長という言葉が出たときから、急に付近の話声が小さくなり、みんながそれとなく聞き耳を立てたのがわかる。発言を慎重にしなくてはならぬ。「執筆の自由、発表の自由を制限して人権問題にされてはこまる、ここは所長じきじきにやんわりと注意しておこうと思ったんじやないか」

「ふむ、ぜんたい何を書いたんだ」

「それが、わからない。こっちは思い当るふしは全然ないんだからね」

「むこうが言いやがったろう。具体的にこの箇所だとか」

「それが、何も言わない。ただやんわりと曖昧に注意した
だけなんだ」

「おかしいやな。それだけの用で呼出すなんて、おかしい
や」

「おれもおかしいと思ったよ。第一、雑誌の原稿なんて、
書信係が検閲してるんだらう。検閲済みの原稿が問題なら、
書信係が責任をとらなきゃ、論理の矛盾じゃないか」

「論理の矛盾」は河野の口癖で、他家雄はわざとここに使
つてみた。果して河野の声から急に刺が消えた。

「まったくなあ、やつらおかしいんだよ。自分たちが何や
つてんだかわからねえんだ。しかし、気をつける。所長じ
きじきの呼出してのはおだやかじゃねえ」

「どうして」他家雄は自分の不安を隠して弾んだ声で言っ
てみた。

「わかつてらあね」

「わからないよ」

「まあその話はやめよう。おたがい気持ちのいい話じゃねえ
からな」

「構わないよ。教えてくれよ」他家雄は付近の者にも聞え
るようにきっぱりと言った。

「所長がさ、ここにいる誰かのことを尋ねやがらなかった
か」

「いいや」

「じゃ、お前自身だけのことを尋ねたのか」

「そうだ」

「それでお前何にも思わねえのか」

「思うさ、変だと思う」

「それだけ思えば充分さ」

他家雄は黙った。河野も黙っている。するとみんなも黙
りこんだ。みんなが二人の話を聞いていたことは明らかで
ある。雀が鳴いている。とつぜん、遠くの方で大欠伸をし
た者がいる。犬の遠吠そっくりに長く尾をひき、いかにも
退屈そのものというふうだがわざとらしい。舟本為次郎で
ある。通称「くそつための為さん」といわれる老人で、不
意に剽軽なことをやってみせる。三人ほどが笑い、そのう
ちの一人が為次郎に話しかけた。それをしおにみんなのお
喋りが再開された。近所の話声はつきりきこえる。河野
の隣房の大田の声である。

「困ったよう。けさよ、文鳥がエサ食べないだ。何だかビ
ンボン玉みたいに丸くなって元気がないだ」

「鳥は丸くなるといけねえっていうぞ。おれの雛も丸くな
つて死にやがった」と河野が言った。

「こいつも死ぬのかなあ」

「糞でるか。糞詰りがいけねえっていうぞ」

「出たか出ないかわからないだ」

「よく調べてみな。糞詰りなら肛門のどこ、指でなでてみると硬くなってる」

「ああ、ああ、死にそうだよ。もう駄目だなあ。こいつが死んだら、きつとおれも駄目になるんだ」

「まず糞詰りを調べろよ」河野がいらだった。

「わからないだ。こいつは死ぬよ。予感だよ、わるい予感だよ」

大田は切なげな震え声となった。泣く前兆である。いったいに平生は陽気すぎるほど陽気な男のくせに、些細なきっかけで咽び泣きをするので、みんなの物笑的となつてゐる。

「ほら泣くぞ」と誰かが言ったとき大田は泣き始めた。方で失笑がおこった。為次郎がすかさず泣き声を真似た。

「突ついても動かねえよ。死ぬんだよ、こいつ。助からねえだよ。おれも駄目だよ」

「おれも駄目だよ」と為次郎が真似た。大田は続ける。

「ああ、死ぬだよ。お前も死ぬだよ。みんな死ぬだよ」

と、ずっと端のほうで大音声が立った。片桐が読経を始めたのだ。時空を稠密に充たすような声は、気まぐれに始まって気まぐれに終る。ほんの一分ほどのこともあれば、二時間にも渡って声が潰れるまでは終らぬこともある。

……ブツゴウアナン、ギューイダイケー、ニャクヨク
シン、シヨウサイホウシャ、セントウカンオ、イチ
ジョウロクゾウ、ザイチスイジヨウ……

その面構えを髣髴とさせるいかつい声である。顎骨が太く張出し目の上の骨が庇のように突出している。ひとたび彼が読経を始めたら何人も制止することは出来ぬ。ずっと以前事情を知らぬ新前看守が咎め立てたことがある。片桐はその場は従順に沈黙したが小一時間ほどして房内で大暴れを演じた。素裸になって、ばりばり齒軋りしつつ窓硝子を破り、破片で全身の皮膚をひっかきまわし、赤ペンキの罐を体にぶちまけたように血をしたたらした。ゼロ番区で窓硝子の内側に金網を張るようになったのは確かそのあとからである。そして、彼の読経もそれ以後黙認されることになった。

この読経を聴いていると、革の鞭で打ちのめされたように痛みと疲労が全身に浸みてくる。あのように肉を蕩かす熱い祈りは、自分には不可能だと思い知らされ、その敗北の念でやりきれなくなる。他家雄は窓を閉め、蒲団机に向つた。開いたままの『自然の中の人間の位置』がこんどはごく自然に彼の意識を吸い込んだ。どんな物事でも本当の

発端は把握することができないのです。人間の起源も同じことです。最近二百万年間にこの地球という遊星の上で人間の発生以外に新しい事実は何もおきていません。人間はまったく新しいのです。人間が地球上にもたらしたことは、地球のながい歴史において初めてのことだったのです。たとえば刑罰は動物にはありません。刑法を作り刑務所や絞首台を案出したのは人間です。懲役と死刑は人間的事実です。それは地球にとってまことに新鮮な出来事だったのです。

「おれは地球にとって新鮮な囚人だぞ」と彼は言ったが、それが独り言だとは自覚しなかった。彼の読書を中断したのは遠くから近付いてくる足音である。

2

囚人は足音に慣れている。巡察の看守の足音だけは耳ざとく聴きつけるけれどもそれに対する反応は習慣的だ。一応は気にするがそれに特別の心構えをすることはない。そのほかの足音となると、多くは聞き流すのみである。出廷、接見、運動、受診、入浴、転房と絶えず出入する囚人の足音を一々気にしてはたまらぬ。

しかし、これら日常的な足音とは違う種類の足音に対しては極度に敏感となる。夜間興奮患者に注射するため駆け付けた医官、監獄法の実際を学びに来る司法修習生、特別許可を受けたアメリカの学生などには食器口の上にある空気抜けの隙間から聞き耳を立てる。そしてもう一つ決定的な関心の的となる来訪者がある。

彼らは大抵七、八人である。特別警備隊の看守たちを従えた保安課長が現われれば処刑はその日の朝である。この時はそのものものしい雰囲気ですぐ分る。しかし教育課長か区長あたりが一人か二人の看守を従えてそとに来訪する場合は大抵、処刑が翌日で、保安戒護の上から前日に告知しても安全と拘留所側が判断したことを意味する。この場合は足音だけでは分りにくい。

いま、他家雄が耳にしたのは三人の足音である。廊下の中央に敷かれた消音用の絨毯じゅうたんの上でわざとのように歩度を乱しているが、どこか忍び足でしかも決然とした足取で、それらしいと分る。どうやら夜来の子感こかんは的中らしい。先頭の一人は重い体をちょこまかと運ぶところから推して、肥満矮軀たいこの人、教育課長らしい。真宗の坊主で制帽が何となくそぐわぬ丸顔で愛想笑をする。

「さあ、楠本他家雄、所長がお呼びだ」

「いよいよ、お迎えですか」